

子どもが感じている「将来の子育て像」に基づいた都心居住環境の評価

-Tokyo と Seoul を対象として-

東京都市大学環境学部 丹羽由佳理 Ph.D

東京都市大学都市生活学部 林和真 Ph.D

日本と韓国は少子化の深刻さが類似しており、首都圏への一極集中傾向も似通っている。ソウルと東京はいずれも出生率が極めて低いが、都心部にはさまざまな施設・機能が集積し、利便性や多様性に富んでいる。都心居住の利点をうまく活用すれば、より良い子育て環境を構築できる可能性がある。そこで本研究は、子どもが感じている「将来の子育て像」に基づいて、都心居住環境を評価することを目的として、東京都 23 区とソウル市 25 区在住の子どもと保護者を対象にアンケート調査を実施した。なお本研究がスタートした 2020 年 4 月は、COVID-19 による世界的パンデミック状況下であった。人口密度の高いソウルや東京の感染者数は地方よりも多く、子どもたちの生活は急変した。そこで当初の研究目的に付加する形で東京とソウルに住む子どもの生活が COVID-19 によってどのように変化したのかを把握した。

また子どもが感じている将来の子育て像については、因子得点によるクラスター分析を行い、子どものグルーピングと属性(居住都市、居住エリア、保護者の就労、保護者の年代)との関係を検定した。またクラスター分析に基づいて、子どもたちがどのような子育て環境を重要だと捉えているのかについて探った。将来子育てをする際には「安全」、「遊び場」、「医療体制」を重要だと捉えており、ソウルと東京の子どもは類似の傾向であった。子育て関心・居住満足度がいずれも高いグループは子育て環境の重要性を高く捉えていることがわかった。また子育て当事者である保護者を対象に、都市部で子育てすることのメリットとデメリットを尋ね、テキストマイニング分析を用いて特徴を炙り出した。子どもが「将来の子育て像」を描けるようになるには、幼い頃から快適な子育て環境のイメージを育むことが求められる。都心部で子育てすることのメリットをいかし、デメリットを解消するような仕組みを考え、子育てのしやすい環境を想起させる教育的アプローチも必要である。